写真資料と景観変容

―澁澤フィルムの分析に向けて―

浜　田　弘　明
HAMADA Hiroaki
（COE 教員）

八 久 保　厚 志
HACHIKUBO Koshi
（COE 共同研究員）

Ⅰ　はじめに

「環境と景観の資料化と体系化」が，神奈川大学 COE「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の第３班のテーマである．その具体的な道筋の第１に，神奈川大学日本常民文化研究所が所蔵する，1930 年代の生活記録写真や映像を活用しての景観の分析や時系列的研究があげられている[(1)]．この写真や映像の資料は，通称「澁澤フィルム」と呼ばれ，財界人としても知られる民俗学者・澁澤敬三とその同人が，昭和初期に撮影した約 4000 点にのぼる写真で，118 冊のアルバムに収められている．撮影地域は日本国内に止まらず，中国南部・台湾・朝鮮半島にまで及び，約 70 年前の各地の景観や生活が記録されている．

しかしながら，「資料点数が膨大であること，写真資料をテクストとした学術的なリテラシーの手法が開発されていない[(2)]」などの事情により，十分な活用が成されていないのが実情である．このため，地理学を専攻する我々は，澁澤フィルムの活用方策の確立に向けて，取りあえず人文地理学的観点から，景観写真の読み解き方の考察を試みている．昨年度，すでに南西諸島の奄美大島の写真 67 枚について，現地調査が実施され，報告がなされている[(3)]．本稿では，現在の景観写真をもとに，澁澤フィルムの分析に向けて，景観変容の要因を検討することとしたい．なお，今年度，現地調査を実施した朝鮮半島の多島海地域については，別に報告を予定している[(4)]．（浜田）

Ⅱ　景観を調べるということ

1　景観とは何か

1990 年代半ばから今日に至り，景観論や風景論は盛んで，そのアプローチは地理学[(5)]のみならず，歴史学[(6)]，社会学[(7)]さらには土木・建築[(8)]，農学[(9)]，文芸の領域[(10)]にも及んでいる．景観や風景は，土地の自然環境や歴史性，地域特性を読む上で重要なものである．ことに文化景観は，長年にわたる人間活動の結果として生み出されたもので，雑然としたものもあれば，区画整理された都市景観のように人工的に整然としたものや，あるいは時として，棚田のように自然と一体化して景観美を生み出しているものもある．

景観という用語は，地理学と植物学の領域では学術用語[(11)]となっていて，伝統的には「可視的な，地

域ごとの特性を持つ地表上の風景，あるいはそのような風景を一様に持つ地域[12]」などと解釈されている．景観は，可視的かつ具体的なものであることから，客観的に把握しやすいと考えられ，地理学の領域では伝統的な研究対象として重要視されてきた．その研究は，景観の中にある個々の構成要素についての分析と解明を行う中から，景観全体の中に何らかの法則性を見出だそうとするものである．

景観は，自然景観と文化景観とに分けて考えることができる．前者は，人間が手を触れていない景観，つまりは無機的または生物的要素から構成される景観ということになる．しかし現実には，全くの純粋な自然景観は，地球上にはほとんど存在しないと言わざるを得ない．一方，後者は，人間活動の影響が及んだ景観であり，人文的要素あるいは，人文的・自然的両要素の組み合わせから構成される．地理学の中で景観は，一つの研究対象として伝統的に重要視されてきたが，その客観的アプローチは決して容易なものとは言えず，実際の景観研究は，位置・大きさ・形態・相理関係など現象的・表面的なものから考察するという方法が取られてきた．これは，近代自然科学における形態論，ことに生物学の分類学に影響を受けたC．リッターによって成立[13]されたものである．

日本国内で景観論がクローズアップされたのは1930年代からで，その中心は辻村太郎であった．辻村は，景観について「大体において目に映ずる景色の特性と考えて差し支えない[14]」とし，景観要素間の安定的調和を見出すことに主眼を置いた．当時の景観研究は，環境決定論が前提とされ，形態論的方法によって景観構造を解明することが主な目的となっていた．

戦後，高度経済成長期を迎え，我が国においてもようやく実態としての景観変貌が始まり，本質的な景観論議をすべき時代を迎えたが[15]，地理学の主流は，この時期になると経済地理学重視の傾向が強くなり，景観とは裏腹の目に見えぬメカニズムの追及，つまりは機能論的研究に移行していた．これは，1930年代以来の景観論が，即物的，軽薄であるとの批判を受け，景観論に重きを置いた地理学における形態論的方法への批判の結果でもあった．こうしたことから，地理学の領域では，戦後しばらくの間，景観論議は姿を潜めてしまった．

1980年代に入り，地理学以外の領域から景観論が見直され，景観論復活の兆しが見られるようになった．樋口忠彦や中村良夫は都市社会学の立場から[16]，また，本研究第3班の責任者でもある香月洋一郎は，民俗学の立場から「新しい日本風景論[17]」として景観研究に新たなアプローチを試みている．ことに香月は，手段としての景観研究という立場を明確にし，可視的なものから不可視なものに至る過程において景観の利用を考え，従来の地理学が目指して来た景観論の盲点を突く形となった．そのような一連の動きの中で，地理学の中にも新たな動きが見られ，水津一朗や千田稔は「新風景論」を提唱[18]した．また，1990年代に入り，愛知大学綜合郷土研究所[19]では，景観の意味論への取組みに着手し，景観の中に地域形成のシステム（構造）を読むという，生態学的研究へと向けた．さらに，阿部一は「景観は客観的な実在というよりは，人間という主体から切り離せないものとしてとらえるべきである[20]」との見解を述べ，地理学における景観論は新たな転換期を迎えた．

このように景観の今日的解釈は，かなり多角的なものとなっている．本報告では，景観という可視的なものからその構成要素を取り出し，その組み立てを考える中からいかに不可視なものを読み込んで行くか，つまり景観は，人間活動とどのように連動して形成・構成されているのか，という問題にアプローチを試みたい．

普段，我々が何気なく行ったり，通る場所については，意外にまわりの風景を気にしていない．しかし，毎日見ているとほとんど変化のない風景も，5年，10年と隔てて見ると大きく変わっていることに気付く．このような身近な地域の風景の移り変わり，つまり景観変化を記録することは，地域変化を探る上で有効的な資料となる可能性を秘めている．

景観を分析する上で，その変化の把握は比較的理解しやすい部分と言える．そのためには，同じアングルや地域を，異なった時期に撮影された写真，または作成された図・模型などの資料を並べ，同一場所を比較することが必要不可欠となる．これらをもとに，景観を分析する時に必要とされる具体的作業は，①景観の分布把握，②建物景観の分類，③景観の構成要素の把握，④景観要素間の機能把握，⑤建物の立地条件の把握を行い，⑥景観の時間的変化を見て行く[21]ことなどである．そのためには，景観の構成要素としての①自然的基盤，②建造物，③街路網，④土地割，⑤人の流動[22]を押える必要がある．以上の諸資料が整った時，「景観を手法として説明に用いることは，土地利用やその時系列的変化を視覚に明瞭に訴えることができるため，きわめて有効である[23]」ということができる．

景観写真は，たった1枚の写真であっても，これから読み取れる情報は実に多い．景観写真を1つの資料としてとらえた時，表面的なものに囚われることなく，その背後の構造をいかに読み込むことが可能かが大きな課題となる．（浜田）

2　景観変容の要因

上述のような視点から，景観変容に作用する具体的要因として今回，自然災害との関連，経済活動との関連，インフラの整備との関連，都市化との関連を設定し，おのおの具体的な地域事例を示すことにする．なお写真撮影は，特記がない場合2003年度・2004年度に行った．

(1) 災害と景観変容

景観変化への自然の影響は，大地の動きや水文，気候などの営力が働いた場合に起こる場合と，日常的な重力，気象の営みによって地表が改変される場合など多様である．とくに大地の動き，例えば地震は，地震の前後で大きな景観変化を及ぼす要因である．景観変化の時系列記録を検討する場合，地震後の変化の記録は，直後の崩壊した景観だけでなく，定点観測が重要である．今回事例とするのは1994年1月の阪神淡路大震災によって劇的に景観変容がおこった兵庫県神戸市の酒造地域である．

(2) 経済活動と景観変容

景観変化の主体がヒトや資本，政治的意志である場合，生産活動とりわけ戦後日本での重化学工業化は景観を変化させてきた．またヒトの生活の主要な関心が生産活動から，余暇・レジャー活動に移ると，観光行動や余暇レジャー活動が，景観変化の主要な要因となった場合がある．資本や政治的意志（政党や集団）がヒトの欲求と結びつくとより大きな景観変化を起こすことになるのである．日本においては，1980年代後半，国民のレジャー指向による資本の諸施設整備や，いわゆるリゾート法の制定による観光を主体とした地域開発は，とくに自然環境の優良な地域における景観変化を推進してきた．今回の事例とするのは重化学工業都市新居浜の工業地域の景観と広島県尾道市の町並景観の変化である．

(3) インフラ整備と景観変容

インフラの整備による景観変化は，短時間で局地的，しかも激烈に進むことに特徴がある．インフラの整備は主に政府や行政など一定の政治的意志が働き，地域の意志にかかわらず企画され，遂行される場合が多いからである．鉄道や道路建設，空港・港湾の整備などの建設工事のほかにも住宅開発，圃場整備，工業団地の造成など土地利用の変化も引き起こすことになる．現在の日本の周辺地域である農漁村地域，島嶼部では，従前の景観が一挙に変化することになる．今回の事例は，島根県隠岐島後での空港拡張工事とそれに伴う景観変化と離島部（与那国島）における集落整備と港湾整備である．

(4) 都市化と景観変容

都市化の中の景観変容から，市街地開発等に伴なう商業地域の景観変化を細かく追った時，道路景観一つ取っても，直線化・立体化・拡幅化・舗装化・歩行者と自動車の分離化といった変化が見られる．また，建築景観の中には，立体化・大規模化・不燃化（コンクリート化）などといった変化が見られる．景観解析に当っては，これらの事象をどう読込むかが大きな課題となる．例えば，建築景観の中で，商店街にある建物の立体化，つまりは階数の増加の意味を理解するためには，機能として小売業以外にどのような変化が見られるかを考慮する必要がある．高層建築物の立体的機能配置を探ってみたならば，低層階は従来通り一般小売店による物品販売・社交・娯楽機能が中心となるが，中層階は大型店による物品販売・業務・管理機能が，さらに高層階になると居住機能が付加されるという傾向が見られ，多くは3階を境に立体的機能分化が発生すると考えられている[24]．このように，道路・建物というハードな部分の景観要素の一部を取り上げてみても，数々の要因からその景観が構成されていることがわかる．つまり，景観解析のためには，不可視な部分についても多角的観点から検討する必要が生じてくる．この点について今回は，韓国南東部の広域市・蔚山（ウルサン）を事例に都市化に伴う景観変容について検討する．（八久保・浜田）

Ⅲ　景観変容の事例

1　日本における景観変容

(1) 灘の景観変容と自然災害

災害後の景観変容の事例として，1994年1月の阪神淡路大地震時壊滅的な被害を受けた灘五郷の酒造地域をとりあげることにする．調査は10年後の2003年2月と2004年1月半ばを中心に行った．この時期，一応の復興事業が終わり，街には表面上の安定がもたらされているように見える．写真1は神戸市灘区，東灘区の住吉地区の酒蔵マップであるが，復旧した酒蔵を探索できるような案内図となっている．写真2は震災前には見られることがなかった地震計が設置された施設であり，それを示す表示が大きい．写真3，4，5，6は新しく建造された酒蔵である．もはや酒蔵とはいえず，酒造工場との印象が強い．写真7，8は酒蔵跡に新築された商業施設や博物館である．旧の町並みでは無かった土地利用が始まっている．一方，写真9，10，11，12は，震災時に壊滅的な被害を受けたものの，被害が軽微な建物の再整備が行われ，地域景観に特徴を与えている．ただ，写真13，14，15，16，17，18のように，震災後酒造とは関係が無くなった土地利用に変わった地区もある．（口絵写真⑰～

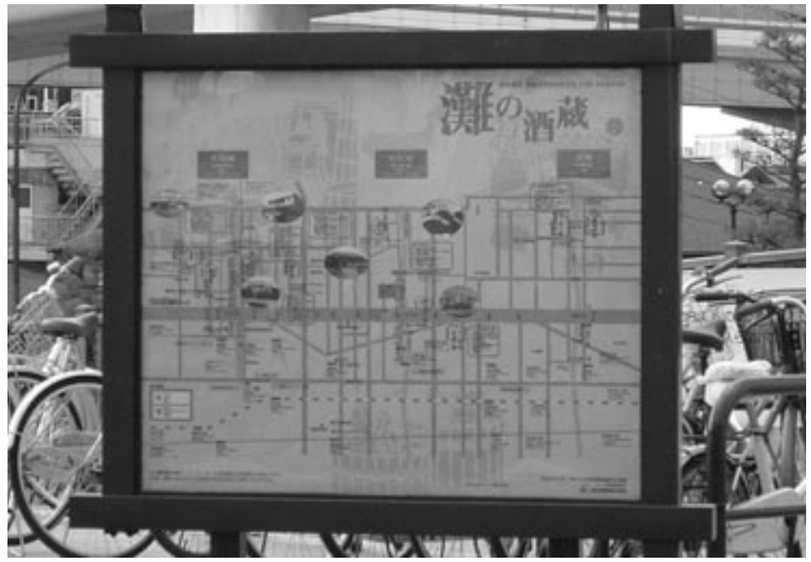

写真１　灘五郷・酒蔵マップ

写真２　灘五郷・地震観測所

写真 3　灘五郷・浜福鶴

写真 4　灘五郷・魚崎郷清流プラザから櫻正宗を臨む

写真 5　灘五郷・浜福鶴

写真 6　灘五郷・櫻正宗

写真 7　灘五郷・櫻正宗記念館「櫻宴」

写真 8　灘五郷・菊正宗酒造記念館

写真 9　灘五郷・白鶴酒造

写真 10　灘五郷・白鶴酒造本社

写真 11　灘五郷・菊正宗酒造本社

写真 12　灘・五郷酒造組合

写真 13　灘五郷・剣菱酒造

写真 14　灘五郷・六甲山系

写真 15　灘五郷：虎屋

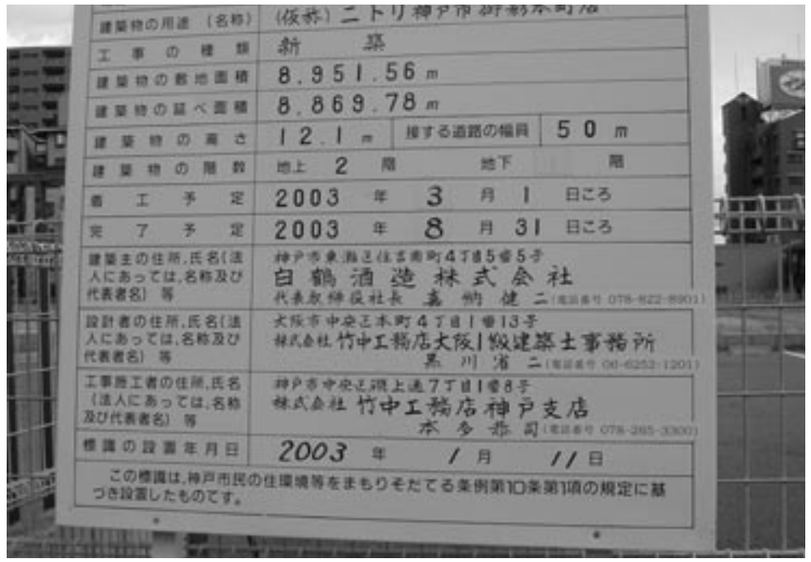

写真 16　灘五郷・看板

写真 17　灘五郷・商業施設の建築予定地

写真 18　灘五郷・デイリーカナート御影店 1

写真 19　尾道・JR 尾道駅

写真 20　尾道・フェリーターミナル

写真 21　尾道（向島）・造船所

写真 22　尾道・JR 尾道駅前から南東方向

写真 23　尾道・漁港と旧市街

写真 24　尾道・向島ドック

写真 25　尾道（向島）・バス停「兼吉」

写真 26　隠岐・神社移転（整備）

写真 27　隠岐・神社（右上が空港）

写真 28　隠岐・新空港の建設現場

写真 29　隠岐・住宅開発

⑲，㉓参照）

(2) 新居浜の重化学工業化と尾道の観光開発と景観変容

経済活動のうち，重化学工業化地域の変化事例として新居浜をとりあげる．銅製錬から化学工業への生産品目の変化によって，別子銅山跡はマイントピア別子（複合観光施設・口絵写真㉔）に生まれかわった．港湾の景観（口絵写真㉖，㉗）も化学工業施設中心の景観に変化している．また，新居浜駅前の再開発も始まっている（口絵写真㉕）．

次に，観光開発と景観変容の事例として，広島県尾道市をとりあげる．尾道は古くからの町並みが保存され，海岸への傾斜地に町並みが形成され，特異な景観をみせてきた．このため，多くの映画のロケ地となり，多くの観光客が訪れてきた．写真19，20，21，22はJR尾道駅周辺の景観であるが，多くの観光客のために，海岸部での公園建設，交通拠点としてのフェリー乗り場，バスセンター，観光案内所，観光施設建設が行われ，現代的な景観が形成されている．一方，写真23，24は，尾道経済の基幹産業の一つとして向島の造船工場や水産珍味加工場の景観も尾道の近現代を特徴づける景観の一つである．向島は瀟洒な木造建築物が見られるが，写真25のように現在では観光客が手近に見られる観光施設兼バス乗り場の一部となっている例もある．

(3) 隠岐新空港建設と与那国島祖内地区の景観変容

写真26，27は西郷町磯地区の神社の整備（移転を含む）状況を示している．写真27の右上の丘陵が新空港の整備地域にあたる．写真28はその丘陵上の景観である．写真29は，磯地区と西郷地区との間にある新興住宅地区である．空港の整備は付帯工事としての道路整備も進めることになり，西郷地区への通勤も改善され，住宅建設も郊外化していく事例である．

離島部，とくに沖縄地方の島々は，1972年の本土復帰後，急速に集落の再編・整備と，港湾施設の建設が行なわれてきた．戦前期，本造や石積の住宅が一般的であった集落景観は，コンクリートブロック造（組積造）や，RC造（コンクリート住宅）に変わり，全体として白色の景観となっている．また港湾諸施設の整備は，人工的な海岸線を造り上げることになった（口絵写真⑳～㉒）．（八久保）

2　韓国・蔚山における都市化の進展と景観変容

(1) 蔚山市達洞の景観変容

韓国・蔚山の現地調査においては，澁澤フィルムの中で撮影地が「里」まで記録され，かつ景観を主体としもののみを選び出し，撮影地の比定を行った．今回の現地調査は，決して十分なものではなかったが，2004年9月5日から12日までの7泊8日の日程で，ソウル・蔚山・多島海の3地域を，各2泊3日の強行軍で概括的に実施した．ここでは，中でも景観変容の著しい蔚山市の達洞地区を事例として取り上げることとする．

蔚山市は，朝鮮半島南東部に位置する慶尚南道の太和江河口部に開けた街で，旧市街地は左岸（北側）に，新市街地は右岸（南側）に形成されている．1997年に，慶尚南道で2番目の広域市となり，2002年現在の人口は107万人，面積は1,056km²で，現代重工業・現代自動車などが立地する工業都市として知られている[25]．

写真30　達洞・三山路を東に望む（2004.9.9撮影）

写真31　達洞・三山路を西に望む（2004.9.9撮影）

写真 32　達洞・三山路脇の民家（2004.9.9 撮影）

写真 33　達洞・三山路脇の民家（2004.9.9 撮影）

太和江右岸（南側）は，かつては水田地帯であったが，1980 年代後半以降に区画整理が進められ，現在はビルの立ち並ぶ市街地へと変貌している．昭和初期に澁澤らが訪れた時，ここは蔚山邑達里であったが，現在は蔚山市南区達洞となっている．現地で確認した 1988 年修正の 5000 分の 1 地形図では，この付近はまだ水田地帯となっていたが，現在は，市街地東部に位置する蔚山駅から西に伸びる三山路沿いに，ロッテ百貨店や現代百貨店などが立ち並ぶ商業地区となっている．また，市庁舎や公共機関の多くがこの新市街地に立地している．

写真 30，31 は，かつての達里南西部，現在の達洞の三山路を東西に望んだものであるが，新市街地の一部となっていることがわかる．中央を走る三山路は片側が 4 車線あり，両側には街路樹と歩道がある大きな街路で，蔚山駅前から工業塔ロータリーへと貫いている．街路の両側には商店や事務所などのビルが立ち並ぶが，写真 32，33 に見るように三山路を一本中（南側）に入った路地には，区画整理から外された斜めの区画に旧民家が散在する．周囲はビルに囲まれているが，戦前のものと見られる民家があり，塀や大樹も残る．

かつての達里一帯は，現在では，整然としたビル街へとすっかり景観が変貌している．この付近をロッテホテルの上層階から撮影した写真で比較したい．写真 34 は，北東方向に撮影したものであるが，見える道路は片側が 3 車線ある都市計画道路で，旧市街地方面に続く．道路の両側には商業施設や金融機関が見える．後方の高層建築物群はアパートで，建築中のものも見える．奥の山地は，標高 200m 程度の低山である．写真 35 は北西方向に撮影したもので，ロッテ百貨店や現代百貨店に近い地域には，飲食店や歓楽街が立地し，後方には多数の高層アパートが見える．この方向には，市役所や文化会館，放送局など公的機関が集中している．写真 36 は南西方向を撮影したものであるが，比較的低層のビル街で，後方には学校が集まっているエリアがあり，奥には，多数の高層アパート群が見える．韓国のアパートの大半は，このような 10 ～ 20 階建ての高層建築となっている．さらに，写真 37 は南東方向に撮影したもので，ここは蔚山駅西南方に当たり，今後開発が予定される地域で，現在は駐車場などの土地利用が目立つ．奥の煙が立ち込めているエリアは，蔚山港に面した工業団地地域である．

新市街地の急速な商業地化は，ここ数年のことで，「ロッテ百貨店蔚山店」（写真 38）は 2001 年 8 月の開店である．この建物に連結した形で，翌 2002 年 1 月にロッテホテルが開業している．このホテルは，日韓ワールドカップ開催に合わせて建設されたもので，蔚山にも試合会場の一つが設けられた．また，ロッテ百貨店には，映画館を擁する「ロッテシネマ」と屋上に観覧車を設けた「マルチランド」が併設されている（写真 39）．また，現代グループのデパート「現代百貨店蔚山店」（写真 40）が，ロッテ百貨店と三山路を挟んで筋向かいの位置にあり，ロッテ百貨店よりもやや早い時期に開店している．ロッテ百貨店西方約 2km の三山路沿いには，ロッテグループの大型スーパー「ロッテマート蔚山店」があり，日本と同様の広い駐車場を完備している（写真 41）．1 階にはファストフード店が出店し，その一つにロッテリアも出店している（写真 42）．

写真 43，44，45 は，新市街地に残る古民家で，蔚山の新市街地となっている達洞も，メインストリートの一歩奥には，一部区画整理されていない地区があり，屋根が反っている伝統的な韓式（韓国式）住宅や，占領下に建築された日式（日本式）住宅がわずかながら残る．

(2) 蔚山・達洞周辺部の景観変容

写真 34　達洞市街地・北東方向（2004.9.8 撮影）

写真 35　達洞市街地・北西方向（2004.9.8 撮影）

写真 36　達洞市街地・南西方向（2004.9.8 撮影）

写真 37　達洞市街地・南東方向（2004.9.8 撮影）

写真 38　ロッテ百貨店蔚山店（2004.9.10 撮影）

写真 39　ロッテ百貨店の観覧車（2004.9.10 撮影）

写真 40　現代百貨店蔚山店（2004.9.10 撮影）

写真 41　ロッテストア駐車場（2004.9.10 撮影）

写真 42　ロッテストア蔚山店（2004.9.10 撮影）

写真 43　達洞市街地の古民家（2004.9.10 撮影）

写真 44　達洞市街地の古民家（2004.9.9 撮影）

写真 45　達洞市街地の古民家（2004.9.9 撮影）

写真 46　蔚山旧市街地遠望（2004.9.9 撮影）

写真 47　蔚山旧市街地近景（2004.9.10 撮影）

写真 48　蔚山旧市街地の民家（2004.9.10 撮影）

写真 49　蔚山工業塔ロータリー（2004.9.8 撮影）

写真 50　蔚山港・重工業地帯（2004.9.8 撮影）

写真 51　蔚山港・化学工業地帯（2004.9.8 撮影）

写真 52　蔚山港の鯨絵（2004.9.8 撮影）

写真 53　方魚洞の漁港（2004.9.10 撮影）

写真 54　方魚洞の漁港（2004.9.10 撮影）

写真 55　方魚洞の路地（2004.9.10 撮影）

写真 56　方魚洞の路地（2004.9.10 撮影）

写真 57　方魚洞の旧日本家屋（2004.9.10 撮影）

写真 58　方魚洞の旧日本家屋（2004.9.10 撮影）

新市街地の対岸，太和江の北側（左岸）には，蔚山の旧市街地が広がる（写真 46）．旧市街地には目立った高層ビルはなく，伝統的な韓式住宅も散見される．また，小高い丘には，文禄・慶長の役に加藤清政が建てたという日本式山城（蔚山倭城）が残る，新市街地に比べると，道路はやや雑然としている．（写真 47，48）

南山路・三山路・水岩路が交差する五叉路のロータリー中央部には，工業都市・蔚山を象徴する「工業塔」が立つ（写真 49）．蔚山湾を取り巻く海岸沿いは今日，工業地帯となっていて，龍淵重工業団地・石油化学産業団地・温山国家産業団地とともに，現代自動車・現代重工業の工場・造船所などが広がっている（写真 50，51）．

蔚山湾の長生浦はかつて，捕鯨基地となっていたことから，現在でも鯨を扱う商店・食堂が港沿いに立ち並ぶ．日本からの客が多いと見え，鯨料理の店には日本語の看板も見られる．港の岸壁には鯨やイルカの絵が描かれ（写真 52），港の外れでは捕鯨船の残骸を見かけることができた．

方魚洞は，現在，蔚山市東区に当たるが，達洞からは太和江河口の対岸に当たる半島部に所在する．この一帯には，現代重工業が進出し造船業が盛んである．そんな一角に方魚津港は所在し，現在も漁業が続けられているが，観光客向けの土産物店や刺身センターなどの立地も見られる（写真 53，54）．この集落の道路は昔のままに狭く（写真 55・56），占領下の日式（日本式）住宅が散在している（写真 57，58）．一見，静かな昔ながらの漁村風景に見えるが，この奥のエリアには，現代重工業の造船所や従業員アパートなどが広がり，地域環境は大きく変わっている．（浜田）

Ⅳ　おわりに

本報告では，まず地理学の立場における景観研究について検討した上で，景観変容の著しい国内の難・新居浜・隠岐などと韓国の蔚山を事例に，景観要素の変化について，比較検討を試みた．

改めて地理学における伝統的景観論をたどってみると，かつては土地利用図という可視的世界の一側面だけを捉えた不完全な状態を以て，無反省に景観と読み替えられる傾向が強かった[26]と言える．また，景観が可視的・具体的事物を対象としていることから，即物的で非科学的であるという批判を浴びると同時に，「土地利用についての論議も狭い視野で非科学的になされていることが多い[27]」といった批判を生む構図も生んでいた．

しかし，可視的・具体的事物を対象としている土地利用を含めた景観研究が，相変わらず即物的で非科学的であると言い切れるであろうか．むしろ景観は，「多様な人間の営為の可視的な表現であり，そうした営為（文化）に接近するための最も物質的な手かかりとなる[28]」のではないだろうか．本稿では，いくつかの観点から景観変容の具体的要因を探ってみたが，景観変容の本質的な部分は人が創り出したものと言え，その結果としての視覚的な部分（建築物や施設の消長，土地利用の変化など）を指標として把握することは重要と考えられる．都市化研究等の上でも，景観（写真）の客観的分析手法の開発は急がなくてはならない課題である．（浜田）

注

（1）香月洋一郎「環境と景観の資料化と体系化」『非文字資料研究』No.1，2003，11～12 頁．

(2) 八久保厚志・須山聡「澁澤フィルムの図像解析とその応用」『年報　人類文化研究のための非文字資料研究の体系化』1，2004，109頁．
(3) 文献（2），105～125頁．
(4) 浜田弘明「澁澤フィルムの景観分析とその課題」『年報　人類文化研究のための非文字資料研究の体系化』2，2005．
(5)「景観」をタイトルとした単行本だけでも，西村孝彦『文明と景観』地人書房，1997，足利健亮『景観から歴史を読む　地図を解く楽しみ』NHKライブラリー91，NHK出版，1998などがあるほか，千田稔・前田良一・内田忠賢編『風景の事典』古今書院，2001も刊行されている．また，景観論・風景論研究の古典的名著として知られる志賀重昂の『日本風景論』が，1995年に近藤信行校訂のもと，岩波文庫青版として刊行され，大室幹雄は『志賀重昂『日本風景論』精読』を2003年に岩波現代文庫から刊行している．
(6)『日本村落史講座　景観Ⅰ・Ⅱ』第2・3巻，雄山閣出版，1990-91など．
(7) 佐藤健二『風景の生産・風景の解放―メディアのアルケオロジー―』講談社選書メチエ5，1994，松原隆一郎『失われた景観』PHP新書227，2002など．
(8) 内藤昌『日本　町の風景学』草思社，2001，中村良夫『風景学・実践編』中公新書1590，2002，同『風景を創る』NHKライブラリー184，2004など．
(9)『暮らしが景色をつくる　ニッポン型景観形成の源流』（『現代農業1995年増刊』）農山漁村文化協会，1995など．
(10) 切通理作・丸田祥三『日本風景論』春秋社，2000など．なお，同名の図書が地理学者・志賀重昂によって1894年に出版されていて，風景論の古典的基本文献となっている．
(11) 文部省『学術用語集　地理学編』『学術用語集　植物学編（増訂版）』日本学術振興会，1981，1990．なお，この用語は，明治時代に植物学者・三好学によってドイツ語のLandschaftを日本語訳されたものである．
(12) 藤岡謙二郎編『最新地理学辞典　新訂版』大明堂，1979．
(13) 日本地誌研究所編『地理学辞典　増補版』二宮書店，1981及び，(12) 文献による．
(14) 辻村太郎『景観地理学講話』地人書館，1937．
(15) 藤田佳久（1994）「農村風土の基本的構図」『人間環境と風土』大明堂，6頁．
(16) 樋口忠彦『日本の景観　ふるさとの原型』春秋社，1981，中村良夫『風景学入門』中公新書650，1982．
(17) 香月洋一郎『景観の中の暮らし―生活領域の民俗―』未来社，初版1983・改訂新版2000，同『空からのフォークロア』ちくまライブラリー28，1989など．
(18) 水津一郎『風景の深層』地人書房，1987，千田稔『風景の構図』地人書房，1992．
(19) 愛知大学綜合郷土研究所編『景観から地域像を読む』名著出版，1992．
(20) 阿部一「景観・場所・物語―現象学的景観研究に向けての試論―」『地理学評論』63A-7，日本地理学会，1990．
(21) 田中欣治『新訂　教養の地理学』大明堂，1994，88～92頁．
(22) 高橋伸夫「都市での野外観察」『地理学への招待』古今書院，1988，150～158頁．
(23) 岩動志乃夫「都心商業地の景観変容」『都市の環境と生活』九州大学出版会，1993，112頁．
(24) 戸所隆「名古屋市における都心部の立体的機能分析―中高層建築物を中心に―」『地理学評論』48-12，日本地理学会，1975．戸所隆「中心商店街の二つの形態―立体化の視点から―」『人文地理』35-4，人文地理学会，1983．鈴木奏到「仙台市における高層建築物の立地と機能分化」『東北地理』31-4，東北地理学会，1979．桑島勝雄「仙台市・福島市のCBDの土地利用―3階以上の建物を対象として―」『東北地理』36-2，東北地理学会，1984．(23) 文献などによる．
(25) 蔚山広域市『蔚山』2003．
(26) 島津俊之「可視的世界からの接近」(18) 文献所収，157頁．
(27) 氷見山幸夫「土地利用の把握」『土地利用変化とその問題』大明堂，1992，1頁．
(28) (26) 文献，157～158頁．

Photographic Materials and Changes in Scenery
―Toward the Analysis of the Shibusawa Films

Hamada Hiroaki　Hachikubo Koshi

This paper shows that photographs play an important role in identifying a change in landscape. It is the result of one of the researches of the 3rd group in the Kanagawa University 21st century COE project.
We think that photographs are important materials for the research of landscape change. And we also think that the analysis techniques should involve fixed-point observation and local comparative study. We looked at natural disasters, economic activity, the development of infrastructure, and urbanization, as factors in landscape change, with the following case studies.
The first is the influence of a natural disaster on the landscape, taking the example of the Great Hanshin-Awaji Earthquake in 1994. The second is the influence of economic activity, looking at tourism development in Onomichi City in Hiroshima Prefecture. The third is the influence of infrastructure building on the landscape. The case studied was airport maintenance at Dogo Island in the Oki Islands of Shimane Prefecture. The fourth is the influence of urbanization on the landscape. The study looked at Ulsan and the surrounding areas in South Korea.
This paper uses photographic materials extensively because photographs show reality. And, we wanted to show that photographs can be effective as research materials. From now on, we will have to devise the techniques to analyze photographs. To this end, the Shibusawa films are important materials for the research of environment change after the 1930's. We must make the most of Mr. Shibusawa's legacy. Then, we must show the usefulness of photographs and films as non written materials for research into the history of civilization.